



文学部生になったら - 在学生・卒業生に聞く -

萩原 佑悟
(Hagihara Yugo 3年生)
大阪教育大学附属高校天王寺校舎卒業
(この文章は、2年生時のものです)



松尾 弥悠
(MATSUO Miyu 2年生)
立命館高等学校卒業
(この文章は、1年生時のものです)

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1	科学史 A	数学 B	西洋史演習	東洋史	
2	神戸大学史 A	阪神淡路大震災 A	ものづくりと科学技術 A	西洋史	社会学概論
3	東洋史	西洋美術史		ロシア語	西洋史演習
4	英語	西洋史演習			
5					

2年生の前学期では基本的に教養科目はまだ残っています。ただ言語の授業数が1年に比べて減るので、その分文学部での専門科目の授業が増えました。僕は西洋史専修なので専門科目は歴史系の授業がメインになっています。教養科目は必要な分として、それと言語以外のコマに専門科目を入れてる感じです。

ある1日の過ごし方

- 7:30 起床。授業が1限からある日の朝は早いです。高校生活の名残があった1年の序盤の頃は楽勝でしたが、段々しんどくなってきます。非下宿勢の朝はもっと早いです。
- 8:50 1限 東洋史。この授業では主にイスラム文化の歴史を学んでいます。予習で授業で扱う洋書を自分で訳して要点を絞り、授業中に先生と一緒に内容を詳しくとっていき流れます。
- 10:40 2限 西洋史。こちらは講義形式です。主に古典期アテナイの裁判について学びます。この授業は他学部から来ている生徒も多いようです。昼休み。教養や言語の授業が行われる校舎と文学部校舎は少し離れている(徒歩10分程度)ので、この間に昼食と移動を済ませます。
- 13:20 3限 ロシア語。2年の前学期では英語含め言語の授業は残っています。内容的には1年に続くくらいのレベルです。
- 14:50 放課後。学校に残ったり家に帰って翌日の予習をします。下宿なので、買い物や家事に時間をとられることもあります。残りは気ままなフリースタイルです。
- 2:00 就寝。翌日は2限スタートで余裕があるので夜更かしがちなです。そしてまた1週間明けました。

神戸文学部の1学年の定員は100人程度と小規模なので、その中でいくつかの仲良しグループが別個に形成されたとしても、メンバーの中には他のグループにも友達がいりたりがいたりすることが多いです。それが重なって全体がうすうす繋がっているのが文学部の人間関係の特徴だと思います。なので交友関係の範囲が限定され過ぎないのがこの学部の良いところの1つだと思います。あと個人的には文学部校舎が標高の低い所にあることを推しておきたいです。六甲台キャンパスへの登下校はど頑張っても登山になってしまうので、少しでも山の麓にあるのはありがたいです。

勉強面で特徴的なのはやはり専修という制度です。1年まではなんでもかんでも幅広い学習を求められましたが、2年からは専修に所属して専門的な学習が始まりました。僕は入学する前から志望専修は決めていましたが、1年の間に各専修の入門的な授業を受けて、その上で決めた人も多そうです。神戸文学部の魅力は結構たくさん専修があって、文系の人も自然科学系の人たちもいます。なので、勉強したい分野が決まっている人はもちろんそれを突き詰められるし、そこまで定まっていなかった人でも探せば見つけれられるような環境が整っているのが文学部の良いところだと思います。

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1			English Communication		初年次セミナー
2	English Literacy		健康・スポーツ科学実習		知識システム入門
3	哲学入門	社会文化入門	情報基礎	史学入門	
4	文学入門	中国語初級		中国語初級	
5					

1年生には、文学部での学びがどのようなものかという授業が多く開講されています。大学生になると、自分で授業を組むなど高校生に比べて自由度が高く、自分で考えて行動する機会が増えるので大変ではありますが楽しいです。

ある1日の過ごし方

- 8:00 2限からの日はゆっくり起床。朝食後、掃除や課題をしたりして時間を潰します。
- 10:00 徒歩で学校へ向かいます。
- 10:40 2限は必修の英語の授業。長文を読んだりライティングをしたりします。課題が多めなのでちょっと大変。
- 12:10 友達と一緒に昼食を取ります。授業が終わってすぐは食堂で飲むので少し時間をずらして利用したり、天気によればお弁当を買って外で食べることもあります。
- 13:20 3限の哲学入門。哲学とは何かということや、様々な時代の哲学者について学びます。
- 15:10 4限の文学入門。オムニバス形式の授業で様々な国の文学作品を読みます。下校。スーパーに寄って買い物をしてから帰ります。
- 17:30 帰宅して夕食を作ります。夕食後は課題をしたり動画を見てまったり過ごします。
- 23:00 就寝。

文学部と一口に言ってもその中には様々な分野が含まれています。神戸大学文学部では、1年生のために各専修について知る授業が開講されており、自分が今まであまり知らなかった分野に触れることができます。私も実際授業を受けて、この学部を受験しようと思ったときには考えてもいなかった分野に興味がありました。入学してすぐに専修を決める必要が無く、自分の興味の幅を広げて悩める時間がたっぷりあるというのは、神戸大学文学部の大きなメリットの1つだと思います。また、文学部は留学支援なども充実しています。期間や行き先の種類も豊富で、自分の目的に合わせて計画を立てられます。

1年生でも参加できる海外研修もありますし、海外からの留学生もたくさんいて外国の方と関わる機会が一気に増えるので、留学に興味のある学生にとって最高の環境です。文学部は他の学部と比べて人数が少ないのですが、その分一人一人に対するサポートが手厚く、学生の相談にも丁寧に対応してくれます。同級生や先輩も優しく、アットホームな雰囲気がこの学部の魅力です。

大学は授業でもそれ以外でもそれまでにしたことがない体験をすることができ、たくさんの刺激を貰えます。高校までの常識が簡単に覆ることもあります。やりたいことが決まっている人は新しい環境で視野を広げることができ、やりたいことを探したいという人にとっても神戸大学文学部はぴったりの場所です。

学部時代の思い出



荒武 叶子 (ARATAKE Kyoko 2020年3月卒業 株式会社オプテージ勤務)

神戸大学文学部は昔で「あそぶんがくぶ」とも呼ばれていたとか。言葉だけ聞くと、不真面目なの?という印象を受けてしまいますよね(笑)しかし、そういう意味ではありません。文学部での学びは、遊びのように幅広く自由なのです。人間・人々に関わるもの全てを学問に取り込んでしまいます。高校までの一斉授業のように、与えられる勉強ではなく、自分の興味のおもむくままに、「どんなことでもどこまで」探求することができます。

例えば、私は地理学専修に所属し、卒業論文のテーマは六甲山における登山でした。同じ専修の同期生はというと、一人はトイ、もう一人は将棋が研究対象でした。見事に方向性の異なる三人ですが、よく研究室に集まっては、講義や本などの他愛もない話題で盛り上がりました。お互いの研究の進み具合に焦ることもしばしばで、良い意味でいつも刺激を受けていました。時には先生も交えたその雑談がコロコロ転がって、思わぬ研究のヒントに行き着くこともありました。

同じ専修の仲間でも感性はこれだけ違いますから、他の15専修の友人や教員陣と比べると、本当に多様な価値観を持っています。専門も趣味も十人十色。毎日の講義が、食堂での会話が、未知との遭遇です。仏像好きの友人に仏像の魅力をたっぷり1時間、事細やかに語られたのも、大学生になって初めてでした。文学部には、何かに夢中になっている○○マニアがわんさかいます。その中で過ごすうちに、私も自然と研究に打ち込み、最終的には卒論を製本して図書館に納めるに至りました。学生の学びをしっかりとサポートしてくれる教育体制ももちろんですが、この周りの人たちが最高の環境です。他では得られない出会いと物事を追求するとう経験が、4年の間に私の殻を破り、一回り大きくしてくれたと思います。皆さんも海と六甲山に囲まれるキャンパスで、「あそぶんがくぶ一周年」として大学生生活を始めてみませんか?

入学から卒業まで

- ① 専修の決定 — 「よく考えて自分の専門を決めることができる」**
文学部には、哲学、文学、史学、知識システム、社会文化という5講座に15の専修があります。1年次の11月末頃に専修を決め、2年生からそれぞれの専修に所属することになります。自分とは文学部でなにを研究したいのか、じっくり考えてから選ぶことができます。そのために、各講座ごとのガイダンスとも言う「入門」、人文学への導入をはかる「人文学導入演習」、そして各専修での研究の基礎を身につける「人文学基礎」など、学生の興味・関心に応じて選択できるよう、いくつかの内容に分けて1年生向けの授業が複数開講されています。これらを参考に、自分が進む専門を決定します。
- ② 文学部の授業科目 — 「四年一貫で学ぶ人文学の多様な広がり」**
文学部の学生が4年間に学ぶ授業科目は、全学共通授業科目と文学部の専門科目に分けることができます。全学共通授業科目は、教養科目、外国語科目、健康・スポーツ科学などで構成されています。文学部の専門科目は、基礎科目、自由選択科目、卒業論文関連科目、卒業論文からなります。下の図に履修に関する学年ごとの大きな流れを示します。

1年	2年	3年	4年
基礎教養科目 総合教養科目	基礎教養科目 総合教養科目	高度教養科目	高度教養科目
外国語科目	外国語科目	専門科目	専門科目
健康・スポーツ科学			卒業論文
専門科目 (基礎科目)	専門科目		

- ③ 講義と演習 — 「徹底した少人数教育と課題探究能力の開発」**
文学部で高い割合を占める授業科目が、特定のテーマを探究する「特殊講義」と、数人から十数人で行う「演習」、いわゆるゼミです。実験やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で行われます。中でも、文献や資料を講読したり、自分で選んだテーマについて研究報告を行い、受講者で議論を戦わせた「演習」は、専門分野の研究手法や考え方を習得し、自ら課題を発見し解決する能力を鍛えるうえで大変重要です。
- ④ 卒業論文**
卒業論文は、文学部4年間の学習と研究の結晶です。自分で研究テーマを決め、指導を受けながら、論文作成のための調査や分析も自力で行ないます。これまでに挙げた授業科目から必要な単位数を取得した上で、原則として20,000字(400字詰め原稿用紙で50枚)程度の卒業論文を作成し、口述試験(口頭試問)に合格すれば、卒業となります。

LET 2021 発行 神戸大学文学部 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5595 http://www.lit.kobe-u.ac.jp/

文学部への好奇心をアップする情報紙

LET

FACULTY OF LETTERS,
KOBE UNIVERSITY
神戸大学文学部

2021

文学部の国際交流 ことばのありか Where is the Word?

「間口の広い」文学部の授業
石山 裕慈 (国文学専修)

文学部生になったら - 在学生・卒業生に聞く -

入学から卒業まで
神戸大学文学部での4年間







ことばのありか

Where is the Word?

昨年もここに同じことを書きましたが、文学部における学びの本質をごくごく簡単にまとめれば、それは「ことばを使って人に何かを伝える方法」ということだと思えます。

そして、このような病禍の中にある時、他者とのコミュニケーションの方法が限られている時、様々な「ことば」の中でも書き「ことば」=文章の大切さがより切実に感じられる気がしてなりません。誰かと同じ空間で対面しながら話をする時、そこで用いられる「ことば」は、色々なものに支えられてその表現を全うします。それは、話し手の表情であったり、聴き手のそれであったり、そこまでの対話の中で生まれた空気のようなものであったり、部屋の明るさであったり、湿度や温度であったりします。しかし、同じ空間で対面することが叶わない時、我々の「ことば」は、そのような支えを失います。そのような状況で自ら伝えたいことを「ことば」でどこまで伝えられるのか、例えば、メールの文章でどこまで書き手の気持ちや伝わるのか、そんな不安に駆られます。そのような時、文章を生み出す力、自らの思いを正確に「ことば」にし、文字の連なりにあらず力が我々の支えになるのではないのでしょうか。文学部で学ぶことの根幹の一つがここにあるような気がします。そして、他者の文章からその人が語りたかった「ことば」を読み取ることも文学部に身につけるべき学びです。

私は美術史家であり、研究対象は、中国、及び日本の古代から中世の絵画です。つまり「ことば」ではありませ

ん。それは遠い昔に遺された「かたち」です。そして、その絵を描いた画家と直接話すこともできませんし、その絵を注文した人、鑑賞した人とも同じ空間にいることはできません。そして、そういった人々の多くは「ことば」を遺してくれていません。美術史は「かたち」からそこに込められた「ことば」を読み取り、その「ことば」が示す意味を考える学問です。そして、時には、それを歴史や文化を異にする空間で生まれ、育まれた人々に様々な「ことば」で伝えることも大切なことです。

神戸大学の美術史研究室では、毎年一回、留学生を対象に日本美術の見方と扱い方を学ぶワークショップを、月一回水曜午後には催されているインターナショナルアワーの時間に行っています。日本を含めた伝統的な東洋絵画は、巻子(かんす、巻物のこと)や掛軸(かけじく)といった額装中心の西洋絵画とは全く異なる形式で保存、鑑賞されてきました(これを表具、表装と言います)。それは、東洋絵画が、絹や紙を基底材(キャンバス)として、墨や天然の岩絵具、染料などによって描かれ、光や湿度、そして水や火に対して極めて脆弱であることと深く関わってきたことを示す「かたち」です。東洋絵画は、これらの様々な劣化要因から画面を護るため、これを小さく巻いて桐の箱に収納すると言う「かたち」で伝えてきました。そして、また人間が作品に触れることにも実は大きな危険を伴います。絵巻物をどのように扱くのか、掛軸はどのように壁面に懸けるのか、そのよ



うな扱い方を知らなければ、描かれた「かたち」を見ることも叶いませんし、また間違った扱い方によって紙や絹でできた表具の「かたち」は、簡単に壊れてしまいます。しかし、その「かたち」に意味や機能があることを知り、その扱い方を学ぶことで、我々の目の前に広げられた「かたち」は、それにしっかりと対峙さえすれば、様々なことを伝えてきます。「ことば」にならない、それを見る者の心のわずかな高鳴りとして。そして、それはそれぞれが歴史や文化を異にする場所で育った留学生たちにも様々な心の音色を残しているようです。

昨年今年も文学部の学びとは「ことば」を学ぶことであると書きました。「ことば」を学ぶことは、その「ことば」の外にある「ことばにならない」ものを感じ取る力をも養います。そして、その外にあるものを、いつの日か「ことば」にできること、「ことば」の外にある何かも含めて「ことば」として人に伝えることができるようになること。ひとりの人間が一生をかけるにふさわしい大切な課題であるように思われます。

学生委員
増記 隆介

LET MESSAGE BOX



私は去年の秋に神戸大学文学部に入っ、神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)を始めました。このプログラムを通して、日本語の授業に出るだけでなく、日本の学生と一緒に文学部の講義にも参加しています。また、4月から受講している「KOJSP演習」では、「相撲は近代スポーツか」という、自分が選んだ論文テーマに取り組んで自らの研究を進めています。実際に大学で勉強する上で、一番貴重だったのは日本で生活できたことかもしれません。やはり、勉強している国に住んではじめて分かることが多いからです。例えば、日本に来る前は、相撲は体格の大きい人しか参加しないスポーツだと思っていたのですが、実は60キロである私でも去年の10月から神大相撲部で活躍しています。私の相撲体験を通して、相撲はテレビで観るプロ相撲だけではなく初め理解できました。イギリスに帰ってからも、「現地に住めば分かる」という経験を大切にしたいと思っています。

この文章は、2019年5月時点のものです。

Adam Powell-davies
(KOJSP留学生、イギリス)



手代木 みずき
(KOJSPチューター学生)

KOJSPの学生たちは授業や語学勉強だけでなく、放課後や休日もサークルやイベントに参加し、日本人と交流する機会に飛び込んでいるようで、留学生活を楽しんでいる姿に感じています。学生食堂は特に気に入らしく、みんな口を揃えて「安くてうまい!」と喜んでいます。(笑) 会話をするとイギリスでの学生生活や現地の情報をいろいろ聞かせてくれます。学生の中には専門性の高い日本中世史の授業を履修した子もあり、毎回前列の席に座り教員の話を聞いてはたくさんメモを取っていました。

10月、私は彼らと共に、広島でのインターナショナル・アクティブ・ラーニングに参加し、核兵器や平和学習について、神大他学部の留学生や現地のボランティアの方々と交えて議論しました。彼らの地球規模の問題への関心の高さを感じると同時に、レベルの高い発言力に刺激をもらいました。コロナウイルスの影響で遠隔授業になってからほぼ寮での生活となり、不安や葛藤があるのではないかと思います。このような事態に、留学生として日本で過ごす中で気づき、感じたことを忘れてほしくないと思います。



Sabine Grzanna
(交換留学生、ドイツ)

3年前、私は日本語の学部生として大阪の大学に留学しました。今回は神戸大学大学院人文学研究科の交換留学生として、2度目の留学だったので、新たな経験を必ずしたいという気持ちを持ってドイツを立ちました。その願いが叶ったのは、神戸大学のボランティア団体のおかげです。神戸では、阪神・淡路大震災の発生とともに生まれたと言われるボランティア文化が大事にされており、若い世代もその文化を受け継いでいます。そのおかげで、留学生であっても、ボランティアセンターの団体と一緒に災害で被害を受けた熊本や東北に行き、地元の方々と触れ合うことができました。



李 敬陽
(交換留学生、中国)

人との関わりが中心の活動なので不安がなかったとは言えませんが、それを乗り越えて挑戦してよかったです。活動を通して、人々がどう災害と向き合い生きているのか、生活や考え方にどんな影響が出ているのか、より分かるようになったと思います。それは同時に、自分を見つめなおすきっかけとなりました。

この文章は、2019年5月時点のものです。



李 敬陽
(交換留学生、中国)

「間口の広い」文学部の授業

本誌には、文学部の授業は「少人数」だという記述が出てきますが、もう一つ、文学部の授業の特徴として、「主要科目に学年指定がない」ことを挙げたいと思います。文学部では、1年次に「文学入門」「人文学基礎」「人文学導入演習」などの基礎科目で土台を固めた後は、選択必修科目である「卒業論文関連科目」42単位を、2年生から4年生までの3年間かけて単位をそろえていくことになります。その結果、例えば私が担当している科目だと、「国語学特殊講義」の教室に、2年生から4年生までが集まることになります。そればかりか、この科目は大学院の「国語学特殊研究」と重ね合わせ科目になっているため、大学院生も混じります。科目等履修生が加わることもあります。このような運用を行っていない学部もあり、例えば本学経済学部では、学年によって受けられる科目が決まっていたり、「履修前提科目」が指定されていたりします。2年次以上で履修できる「経済成長論」は、1年次の「中級ミクロ経済学」と2年次の「中級マクロ経済学」とが履修前提科目となっているのがその例であり、2年生に上がった人がいきなり「経済成長論」を履修することは想定されていません。土台を固めながら高い建物を建てていくイメージだと思います。

それでは、2年生から大学院生まで同じ授業を受ける文学部というのは、2年生に大学院レベルの「難しい」授業を受けさせる、理不尽な学部なのでしょうか。それとも、人文学の大学院生というのは、2年生でも分かるような「易しい」内容で満足する人たちなのでしょうか。

私は、文学部の授業というのは、「難しい」とか「易しい」とか、そういう次元のものではないのだと思います。物理的には同じ講義であっても、2年生には2年生に相応の聞きどころがあり、大学院生には大学院生に相応のものを吸収できる。どこからでも入れて、好きなどころを好きにだけ味わうことができるのが人文学の醍醐味なのであって、「ここまでが、2年生で履修する○○論の内容」「ここからは、○○論の履修を前提にした××

石山 裕慈 准教授 (国文学専修)



学の内容」のような細分化や範囲の設定は、文学部にはなじまないのだと思います。下から建物を作っていくイメージではなく、1年次に基礎を固めたら、あとは3年間、漆を重ね塗りするようにして学問を深めていく…そんな図式でしょうか。

このしくみは、教員にとってもある種の緊張感をもたらすものです。あらかじめ定められた範囲のない、国語学の広い範囲からテーマを切り出してきて、まとまった内容の講義を行う。しかも一人の学生は何年か続けて国語学特殊講義を受講するわけですから、同じ内容を毎年扱うわけにはいきません。一人の学生が、ある程度バランスよく国語学の知識を得るためにはどういった内容を組み立てるのがよいか…そんなことを考えているうちに、教員の方にもしばしば新たな着想がもたらされます。大学教員の業務に「教育」と「研究」がありますが、両者が不可分であることをかみしめるのです。